



TITLE:

# 文化現象の凝集作用(四・完)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

---

CITATION:

恒藤, 恭. 文化現象の凝集作用(四・完). 經濟論叢 1927, 25(6): 1181-1193

ISSUE DATE:

1927-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128617>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第

卷五十二第

行發日一月二十年二和昭

## 論叢

社會黨の農民獲得運動

河田 嗣郎

租 稅 道 義

神戶 正雄

徳川時代に於ける長崎の支那貿易

矢野 仁一

スミス「富國民論」の基礎的考察

石川 興二

文化現象の凝集作用

恒藤 恭

## 說苑

我が國の地方費國庫補助制度

中川與之助

## 雜錄

大名領地について

本庄榮治郎

獨逸の租稅收入

沙見 三郎

聚落に關する三新著

黑 正 巖

## 法 令

銀行法施行期日ノ件・銀行法ニ依ル地域指定ノ件・銀行法ニ依ル銀行ノ特例ニ關スル件・銀行法ニ依ル人口一萬未満ノ地ヲ定ムルノ件・銀行法施行細則

## 附 錄

本誌第二十五卷總目錄

# 文化現象の凝集作用 (四・完)

恒 藤 恭

## 十 文化形態

各種の文化領域はそれに特有なる本質と理念とをもつ。ある文化領域の中に見出される諸々の文化現象は、その領域に特有なる本質を顯現することにより之に屬する資格をそなへるに共に、その領域に特有なる理念に照らして或は合價值的なるものと判斷され、或は反價值的なるものと判斷される。文化現象の凝集作用の概念は主として文化領域における文化現象の本質の顯現の様に着眼して定立されるものであるが、前述の如く、文化現象の凝集作用の成り立つ處に文化現象の本質が比較的に純粹にかつ豊富に顯現されると言つても、この事は直ちに斯かる状態が文化現象の理念の見點からして價值あるもの、望まじきものと承認され能ふ状態たることを意味するものではない。

しかしながら、他方において、文化現象の凝集作用に關して文化現象の理念の見點が沒交渉で

あると言ふわけではない。むしろ或る種の文化現象の本質が同一の文化領域に屬する文化現象のすべてを通じてあまねく顯現するのでありながら、一方には比較的純粹かつ豊富な様相において顯現し、他方にはこれと反對な様相において顯現する傾向の存在することは、文化現象の理念とその本質とを關聯せしめて考察する見地からして説明され能ふと思ふ。そして私はこの關聯を文化現象の形態<sup>\*</sup>すなはち文化形態<sup>\*\*</sup>において見出し得ると考へる。

或る文化領域の内面にあたへられる諸現象はその領域に特有なる形態を獲得して之を構成する傾向をもつ。云ひかへると、各文化領域の内面にはそれに特有なる文化形態が生成し、未成熟なる状態から成熟せる状態へと發展しつゝ、その領域の特性を呈示する傾向をもつ。

文化形態は文化現象の基盤たる自然現象もしくは精神現象の形態によつて制約されるものではないけれど、これらの形態が成り立つ思想的平面とは異なる思想的平面において成り立つ。たとへば、經濟的文化領域の中にあたへられる勞働者、金融業者、小賣商人といふ如き文化現象は、文化主體の特殊の形態を呈示するものであるが、個々の現實の勞働者、金融業者、小賣商人の肉體的形態、たとへば容貌、體格、容姿などを意味するものでもなければ、彼らが工場において勞働し、事務所において執務し、店舗において商ひをなす場合に彼らの意識過程の裡に現れる精神形態、又はこれらの人々の何等かの性格的形態の如きを意味するものでもない。かやうな自然形

\* こゝにいわゆる形態は、内容 (Inhalt) 又は素材 (Stoff) に對立するものとしての形式 (Form) を意味するのではなく、單純なる形象 (Figur) の綜合の上に成り立つ Gestalt を意味する。  
\*\* これは文化現象の凝集作用の問題に關聯して文化現象の形態に論及するのである爲に、文化現象の形態が如何なる構造及び性質をもつかと云ふことについての委しき考察を試みることを省略する。

態又は精神形態はこれらの經濟主體の對象的成立の基盤を成し、その對象的內容を制約するものではあるけれど、これらの經濟主體の具へる文化形態はそれから獨立した實在性を有する。而して、ひとしく經濟主體ではありながら、それ／＼特殊の形態的內容をもつことにより、勞働者、金融業者、小賣商人といふ如き經濟主體の異なる形態を呈するのである。又たとへば、一個の陶器はその自然形態においてはたゞ一つの空間的複合形象を成しつつも、文化現象としては、或は商品としての形態、或は藝術品としての形態、或は所有權の客體としての形態をそなへる。更にとへば、ある個人の或る時刻における意識の裡に發生する若干の精神形態の連續が、宗教的には神への默禱としての形態たることもあれば、道德的には善き動機と惡しき動機との相争ふ過程としての形態たることもあり、法律的には犯罪の意思の決定としての形態を示すこともあり得る。別の種類の文化形態に例をとるならば、富の循環といふ經濟過程は卸賣取引又は投機取引、公債の發行又は租税の徴收といふ如き種々の形態をとり、知的教育は學校における授業、通信教育、家庭教育といふ如き種々の形態において成り立つ。宗教、教育、政治、法律、經濟等の種々の生活方向における組織もしくは制度は、特に複雑なる構造をそなへた結合的文化形態を成すものである。

かやうに、各種の文化現象はそれ／＼多様な形態を成しつつ、各種の文化領域の内面をみたとす

のであるが、その形態の多様性にも拘らず、それらの文化現象の内容を通じて同一の現象の本質が顯現するものと認識される故にこそ、同一の文化領域の存立が思惟され能ふわけである。而して同一種類の文化現象の本質が斯く多様な形態をもつ文化現象において顯現する所以は、一方には文化現象の基盤に含有される自然的素材及び精神的素材の多様性に由來することは言ふ迄もないが、他方には文化活動の主體たる人間の意識を通じて文化現象の理念が文化領域の形成に對し間接的影響を及ぼすことに因り、一定の文化現象の本質の顯現をして多種多様な態様を呈せしめると考へられるであらう。

文化形態の根柢には自然形態又は精神形態が觀取される。文化現象の基盤たる此れらの實在要素が文化意味と結合することにより文化現象は成り立つが、文化意味とその基盤との結合が十分に行はれ、従つて文化意味の現實化された内容が客觀的に明瞭に認識され能ふやうな場合において、文化現象の形態は成立する。そして文化領域の中にあらはれた文化現象が未成熟の形態又は半成熟の形態を提示せる状態も觀取されるし、その成熟の程度についても種々の段階が觀取される。

文化現象は一定の形態を獲得し又は具有することにおいて、文化現象の理念に對し一定の型式的姿勢を示すものである。諸々の文化形態はその關はる文化現象の理念の見點から見て必ずし

も望ましい結果又は作用を提供するとは限らぬ、言ひかへると諸々の文化形態はそれ自體として合價值性をもつものではない。しかしながら文化形態においては文化現象の理念の方向へみちびき得る通路が開かれるのであり、これを利用することにより人間は多大の勞力をはぶき、かつ比較的に確實な歩調を以て文化現象の理念の方向へ進むことが出来る。元より個別的に見て、それは人間が斯かる前進において必ずゑらばなければならぬ通路たるものでもなければ、それを選びさへすれば必ず望まれる地點に到達し得ることも限らぬけれど、一般にその地點への到達の機會もしくは可能性を何らかの程度において確保する意義をもつものである。その簡單な例は種々の道具又は器械において見られるであらう。これらの文化形態に比すれば遙かに複雑なる性質と構造とをもつ文化形態としての社會組織又は社會制度等についても右の所説はひとしく妥當する所である。

例へば、原始的採收的生産、家内工業的生産、近代工場工業的生産等の經濟現象の諸形態、身振り又は手眞似を以てする思想傳達方法、無節的發音又は寫象的記號による思想傳達方法、有節的發音又は通常の文字による思想傳達方法等の言語現象の諸形態、家庭における子女の非形式的自然的教育、親方の仕事場における徒弟の見習教育、學校における生徒的教育等の教育現象の諸形態などをそれと比較して考察するとき、これらの文化現象の各者において觀取されたる形

態的差異は必ずしも價值的差異を意味するものではないが、經濟現象、言語現象、教育現象等の理念の見點から見るとき、成熟せる文化形態においては未成熟の文化形態の場合に比して文化現象の本質が一層判然たる形態をあらはす。従つて成熟せる形態においては各種の文化現象はそれ／＼其種の文化現象として認識されることが容易であり、かつ斯かる形態をもつ文化現象においては一定の種類の文化現象の理念への型式的姿勢がより十分な程度において觀取される。元より右の如き文化現象の成熟せる形態は經濟價值、言語價值、教育價值等の實現若しくは發展に役立つのみならず、例へば生産の失敗、欺瞞又は誤解、教育の形式化、機械化といふ如き反價值的結果にもみちびく可能性を有する。しかしながら成熟せる形態をそなへた經濟現象、言語現象又は教育現象において、これらの現象の本質が比較的に純粹かつ豊富に顯現することは首肯され能ふ所である。言ひかへると、この種の現象において經濟現象、言語現象又は教育現象の凝集態を認識し能ふのである。

此節の所説を要約すると——文化現象の本質は文化現象の内容を通して經驗の世界に顯現するに當り、文化現象をして多様の形態において成り立たしめる可能性を提供するが、文化現象が現實に多様の形態をとる所以は文化現象の本質の見點のみからしては理會され難く、文化現象の理念の見點を加へることによつて理會され能ふ。而して各種の文化領域の獨立化作用に伴うてそれ



に特有なる文化形態は生成し、後者が未成熟の状態から成熟の状態に到達すると共にその領域における文化現象の凝集作用が行はれるのである。

## 十一 認識の凝集態としての科學

前節に到るまでの所論は、文化現象の凝集作用に關する總論に該當するとも云ふべく、次には、言語、宗教、藝術、學問、教育、政治、法律、經濟等の諸文化領域につき、個別的に各文化領域において文化現象の凝集作用の概念がいかなる意義を有するかを考究することにより、以上の所論を發展し且つ補充することを要するわけであるが、此回を以て本稿を終了する爲に、單に學問的文化領域のみにつき所要の考察を試みる事とし、その他の文化領域についての考察は之を他の機會にゆづりたいと思ふ。

『現象としての認識』の見點からすれば、科學は常識と原理的に性質を異にするものではなく、常識の方法的に精練され發展されたものが科學に他ならぬ。二者は認識といふ一つの概念の下に包攝されることが出來、常識は認識の第一階段として前科學的認識たる地位に立つ。そして既に常識の進みはじめた道程と同じ方向をたどりつゝ、一層高き平面に昇り行くのが科學的認識の任務である。認識は人間の生活方向の一つとして生活實在の一構成要素たるものであり、認識的文化

\* 政治現象については別の機會に論及する所があつた（拙著、價值と文化現象 P. 184 以下参照）。

\*\* 認識論又は方法論の見地からみた科學と常識との性質的差異如何は茲では主たる問題ではなく、科學が經驗的實在の中に文化現象として成り立つ様相が關心の對象となつてゐる。

領域の内面における部分領域として常識と科學とは並存するのである。科學は常識の形態化されたものであるとも、又は常識において未成熟の状態にあつた認識形態の成熟の状態に達したものが科學であるとも言ひ得べく、科學において認識現象の凝集態を、常識においてその擴散態に當面すると思ふ。

常識と科學との性質上の相違は、認識の理念の見點から觀て前者は反價值的なるものであり、後者は合價值的なものである點に存せぬ。理想的状態に到達したものとしての科學ならば兎も角、文化現象の一種としての科學は不斷の歴史的發展の經過において修正變革を受けるものであり、従つて合價值的成分のみならず反價值的成分をも含有するものとして成り立つ。他面において、常識とてもやはり歴史的發展をなすものであり、合價值的成分をも反價值的成分をも含有する。

普通には、常識と科學との相違は後者が體系的認識たるに反して前者は非體系的認識たる點にあると説明される。けれども、嚴密に言へば、斯やうな説明は理想状態における科學についてののみ十分に妥當するものであり、現象状態における科學は必ずしも完全なる體系性をもつとは限らぬ。そして發達の初期における科學は甚だ不完全な體系的認識たるを常とするが、斯かる階段における科學もやはり科學たるものとして認められるのでなければ、學史について云爲することは

意味を成さぬ事となるであらう。科學の發達過程の終極點たる完成的知識體系に到る迄には數多くの發達階段の存することが知られる。他方において、常識は全く體系性を缺くといふ事は出來ぬ。元來あらゆる認識は體系構成的傾向を内含することなくしては成立し得ぬものであり、例へば實在に關する認識について云へば、それは必ず若干の實在的範疇の見點によつて制約されざるを得ず、この關係からしてもおのづと體系への方角に沿うて成立するのである。この事柄は前科學的認識についてもひとしく觀取される所である。たゞ科學の場合に比すれば、常識の場合には體系構成への意向は無自覺的に作用し、その體系性は萌芽の形態において潜在的に含有されてゐる。科學の特色はかやうに常識において無自覺的に含有されてゐる體系性をあらはにし、諸々の實在的範疇の機能を的確明瞭ならしめ、思想内容の間に存する統一の關聯を一層完成することに存する。斯くすることにより科學<sup>\*</sup>は高度の體系性をそなへた知識を獲得し、その對象たる實在の構造を統一的に把捉し理會し能ふ次第である。

斯かる仕方で科學の生成することは、とりも直さず認識が文化形態として成り立つことを意味する。——一般に形態は單純形象の結合的統一を意味するものであり、文化形態も亦斯かる構造において存立する。言ひかへると、あらゆる種類の文化形態は體系性を内含するものであり、數多くの文化形態によつて組成される文化領域も亦一層包括的な體系<sup>\*\*\*</sup>的構造を示す。文化科學が

\* 以下において科學といふとき、主として經驗科學をさす。

\*\*\* 科學における體系性と他の種類の文化形態における體系性との間にいかなる差異が存するかはこゝでは問題としない。

文化領域の構造を統一的に把握し得るのは、根本において其對象の側に内住する體系性に基く。すなはち科學が文化領域の一つとして體系性を有するのは、科學のみに特有な事柄ではなく、すべての文化領域に共通する事柄である。

科學において俄かに認識的文化形態が出現するわけではなく、後者の生成はすでに常識において開始されてゐる。常識と科學との間に體系性の發現を目標として正確なる境界をわかつことは不可能である。たゞ前科學的認識においては未成熟の状態にある文化形態が科學的認識において成熟の状態に到達して行く點に常識と科學との機能の差異が反映される。科學の内容も常識の内容も共に認識現象としては認識現象の本質を顯現せしめる地位にあり、いづれも眞なる知識を提示する可能性を有する。しかし科學は認識の理念への型式的姿勢をそなへるものであり、科學において認識現象の本質は一層純粹にかつ豊富に顯現しやうとする。だから、科學においては認識現象の凝集態を觀取し得るし、常識においてはその擴散態を觀取し得ると云ふのである。

この點につき、文化現象に關する認識は特殊の様相を示す。文化的認識の對象たる種々の文化領域はそれ自身理念への傾向性を必然に内含するものであるが、この傾向性はその領域における人間の活動をさして發現する。而して實踐的活動にたづさはる人々の意識を基礎として形成される所の常識は、一方にはその活動の對象たる文化領域に特有なる理念によつて支配される傾向

をもつと共に、他方には該領域を認識せむとする認識理念への意向を有する。前の傾向は後の傾向を促進し、また後者は前者のために役立つ。ただし或る文化現象に關する認識が體系性を加へるに従つてその實際的效用が増加する。これに基いてその文化現象に關する實踐的活動が行はれるときは、そこに一層大なる體系的構造が成り立つが、斯かる事態は反射的に常識を刺戟して、一層進歩せしめる傾向を存する。かくして各種の文化現象に關する専門家的常識は發生する。それは文化現象に關する單なる常識から文化科學への推移の中間階段を成すものであり、文化的認識の半成熟形態ともいふべく、單なる常識に比すれば凝集態を成すものと視られ、文化科學に比すれば擴散態を成すものと視られ得るやうな位置を占める。

各種の文化領域における専門家は文化主體の形態づけられたものであり、それ自身文化現象の凝集態を呈示するものである。而して専門家が階級的に又は職業的に統一的集團を構成するとき専門家的常識は相當に度の高い體系性を獲得し、内容の豊富さを増大する。かやうな傾向が強まるに従つて専門家的常識は次第に成熟せる認識形態をそなへるに至るが、一般に實踐的關心の爲に科學的理念への意向が抑制されがちである故に、學問形態をあらはすに至らぬのである。

文化科學はその對象の側において専門家的常識が文化現象の形成に對し深大なる影響を及ぼすことを十分に考慮に入れなければならぬと同時に、専門家的常識からして直接に多くの刺戟なり

\* 茲では包括的な意義をもつものとして此語を用ひる。すなはち特殊の社會的地位にもとづいて或る文化領域における文化活動にたづきはる人々をおしなべて専門家とよぶわけである。

暗示なりをあたへられる。文化現象に關する専門家的常識が特殊の發達を成してゐる例として宗教、法律及び經濟の場合を舉示し得るであらう。宗教的文化領域において宗派及び宗教家は凝集態に在る宗教現象に數へられ得るものであるが、宗派の中心を成す宗教家の間に發生し蓄積せる宗教的知識は、宗教的傳統の形態を獲得し、一定の教理的思想を包容するに至る。各宗派の教理を考究對象とする神學は、斯かる専門家的常識に一段の精練を施すものに他ならぬし、比較神學や宗教學の如きはより純粹に認識の理念に遵從せむとする態度をとるものと言ふべきであらう。法律的文化領域においては制定法及び裁判官において法律現象の凝集作用の顯著なる例證を見るのであるが、制定法の内含する法律思想及び裁判官の判決の呈示する専門家的常識は、高度の體系的認識たる性質を有する場合が多い。法律解釋學が羅馬における聖俗兩様の裁判官の間における専門家的常識から生まれ出た歴史的經過は、認識現象の凝集作用につき興味多き事例を成す。

近世において經濟學が體系的形態を不十分ながらも獲得し、その學問的發達を開始したのは、マーカンチリストの功績に歸せられてゐるが、かれらの間に集積した經濟的認識は決して統一的なる理論體系を形成してゐたものではなく、その時代の政治家や大商人などが實際生活において把持した經濟生活上の原則に關する知識の集合形態たりしたのであつた。かやうな經濟的認識の凝集傾向が一層自覺的に展開せしめられることにより、フイジオクラットの經濟學説は成り立ち、

更にアダム・スミスにおいて經濟學は一層明瞭なる形態を示すに至つた。かやうな學史的關係とは別に、現代における經濟的認識の現象狀態を概觀するとき、經濟現象に關する單なる常識、専門家的常識、經濟學の三者の對立が非常に複雑な様相を呈するのに當面するが、經濟的認識の凝集傾向の見點は斯かる經濟的認識の領域の構造を統一的に把握し理會する上に資する所があると思ふ。但、他方において經濟現象の凝集作用の見點からして經濟的認識の對象たる經濟的文化領域その者の構造を吟味することにより、右の理會をたすけることを要する。

文化現象としての科學現象は、ひとり或る程度の體系性をそなへた思想内容の集積のみを以て盡きるものではなく、斯かる思想内容の形成にたづさはる學者及び種々の學術的團體、斯かる思想内容の形成の爲にする個人的及び團體的努力、斯かる思想内容の表現又は保存に役立つ書籍、雜誌、圖表、これらの中に載せられた論文、資料等も亦科學現象たるものであり、更には學派とか學界とかいふ如き複雑なる現象、學校、研究所、圖書館とか、これらに附屬する種々の物的設備等の中にも科學現象として見られるべき分子が存在する。すべて斯やうな瞭然たる文化形態をそなへた科學現象は凝集態における認識現象を意味するものであり、この他に生活實在はほとんど限りなく多様な所の擴散態における認識現象を呈示するものであることを無視すべきではない。けだし後の種類の認識現象においては瞭然たる形態を觀取し難いといへ、その對象的内容の中にひとしく認識現象の本質の顯現を認識し得るからである。(完)